

機器を使ったボールフィーリング上達についての考察 - キッズ年代(U-10)に着目して -

原ノ園 大将 (競技スポーツ学科 コーチングコース)

指導教員 松田 保

キーワード：習慣、周りを見る、ボールフィーリング

1. 緒言

2010年ワールドカップにおいて、ピッチ上の監督ともいわれるセントラルMFの、日本代表遠藤保仁、長谷部誠とスペイン代表のシャビ・エルナンデス(以下:シャビ)とを比較すると、パスの本数、成功率共にシャビの方が上回っている。

シャビのパス成功率の高さは、正確なボールフィーリング(:コントロール、パス)が優れており、パスをもらう前に周りをよく見て、次のプレーに移るための的確な判断を下せているからであると考えられる。

そこで本研究では、(株)ショーワスポーツが開発した機器を使用することによって、実際のゲームでもパスをもらう前に周りをよく見ることによって情報を入手し、かつ正確なボールフィーリングを身につけることができるかを検証した。

2. 研究方法

「NPO法人 BIWAKO SPORTS CLUB キッズサッカーアカデミー」の小学4年生(9~10歳)の男子13名を対象とし、機器の測定と測定前後のゲームをビデオ分析した。機器の測定・ゲーム時は、実験者に「意識することは？」と発問し、「周りを見る」、「落ち着いて取り組む」、「正確にパスする」といった答えを導き、意識させるようにした。

3. 結果・考察

機器の測定中に首を振って周りを見た回数が向上したことから、測定を反復するこ

とにより、ボールフィーリングがスムーズになり、周りを見る習慣が身につくと考えられる。測定前のゲームでは、すべての実験者において、パスをもらう前に周りを見る動作は観察されなかったことから、実験者はこのような動作が習慣化されていなかったと言える。測定後のゲームでは、3人がパスをもらう前に周りを見たが、ボールフィーリング成功の場面は観察の中で捉えることが出来なかった。

4. まとめ

本研究において、正確なボールフィーリングが身に付いたことを断定することはできなかったが、実際のゲームで、パスをもらう前に周りをよく見ることによって情報を入手する動作が身に付くということは明らかになった。機器使用により、ボールから目を離して周りを見る動作が引き出され、反復することによりボールから目を離すことに慣れ、その後命中率が高まったので、機器使用は効果があったと言える。

5. 参考文献

FIFA 公式ホームページ：

<http://www.fifa.com>

豊田一成：ジュニアサッカー キッズのトレーニング集(2006)株式会社カンゼン